

---

月 刊

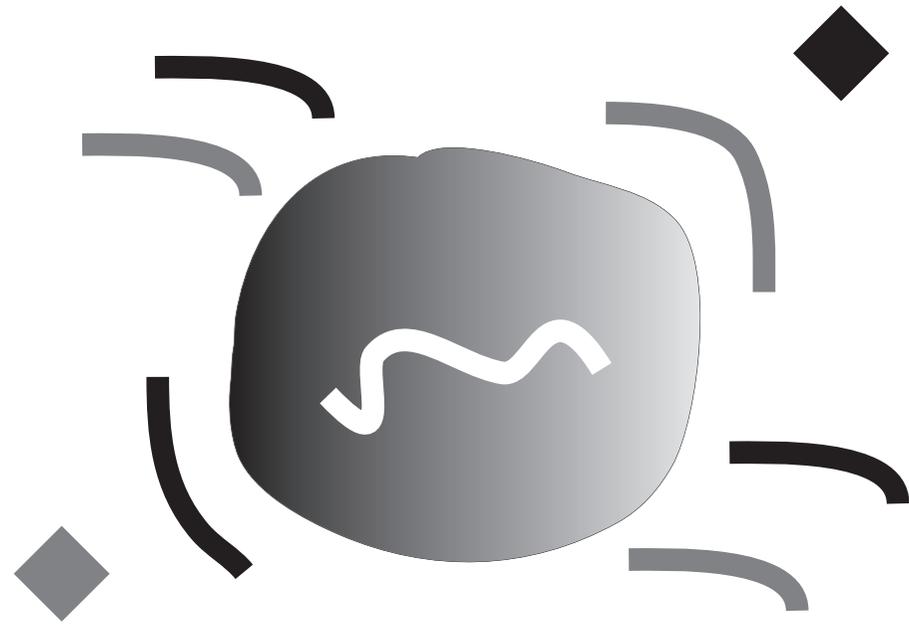
---

# MéLange

---

VOL.97

---



---

2014.11.30

詩と評論

---

月刊「MéLange」VOL.97

2014/11/30

月刊「MéLange」編集部

詩 & 俳句

庭常の花……………岩脇リーベル豊美 03  
 書く……………月村 香 03  
 大瑠璃泥貝／カエルを踏んでしまう……………中嶋康雄 04  
 蜂起……………大西隆志 06  
 測量……………寺岡良信 07  
 長いさんぼ……………御着かおり 07  
 バカボンのパパ……………野口 裕 08  
 天の川……………高木富子 08  
 足跡……………有時秀記 09  
 茶色い妹……………黒田ナオ 12  
 亡者も生者も……………大橋愛由等 13  
 異国のサドル／染透く……………福田知子 14  
 往路……………上野 都 16  
 アンクレットを隠し〈俳句〉……………高橋雅城 17  
 いびつなコインロッカーズ……………中堂けいこ 18  
 あなたへ……………富 哲世 19

エッセイ

<詩人通りより>17「11月9日に思うこと」……………岩脇リーベル豊美 10  
 HANAだより07〈映画『悪童日記』/原作をかたわらに〉……………中堂けいこ 15  
 <神戸詞あしび>86「自在な俳句は詞として魅力」……………大橋愛由等 20

編集部だより★18／元気な人である。写真家・作家の板垣真理子さん。第97回「Melange」読書会のゲストスピーカーとして呼びました。真理子さんはアフリカ(ナイジェリア)のポップ・ミュージックへの関心から始まって、現地を訪問。そこで知ったヨルバの文化や宗教に魅入られた(ヨルバの文化や神話世界が活写されているのが、エイモス・チュツオーラが書いた小説『やし酒飲み』である)。さらに、アフリカから奴隷として渡ったブラジルやキューバにもヨルバの文化が伝播されていることを知り、それらの地のひとびとと接し、写真を撮り、エッセイをしたため、いくつかの書籍も上梓している。そんな彼女が神戸に移り住んだのは、一年前。子供の頃、神戸市垂水区塩屋町に住んでいたこともあるそうである。そんな真理子さんをゲストに迎えたのは、友人の紹介ではじめてお会いしたとき、「わたしは視えないものを(写真で)撮るのです」といったその一言が気に入ったからなのであった。(大橋記)

◆庭常の花

岩脇リーベル豊美

あなたが消えてしまつたらわたしはどう魂を持ち堪えようか  
 亜熱帯の高地にもう漆黒の実は熟さない  
 かつて生成りの花が震えた場所には茫漠とした空洞が咲き残る  
 わたしは燻し銀の靴を履きそこに立っている

たとえあなたが消えてしまつてもあなたの言刃と遊ぶから  
 わたしの魂は足を引きずり揺れたり濡れたりしながら  
 踊星が消えないように遊ぶから

光冠の描かれない聖人が  
 止まり木にしていたこの枝で首を吊る夢を見た  
 わたしは無差別に羽根のない天使を選んでいた

◆書く

月村 香

夜に夕暮れはなんとかという声を聞いてときめくのは蝶々夫人  
 ということばを聞いただけで鳥肌がたつわたしの感性がすでに  
 どちらかに incliner しているせいだ  
 エネルギ―補給のためにはあめをなめてもいいけれどチーズを二個くらい食べてねそれに  
 コーヒーが合うと思うかしらわたしなら最近はおアルグレイばかりひどくおながすすくのみもんなあたり前すぎる詩の産卵のためわたしは少しぬる目のホツトレモンティーの中に入って海亀のような産卵をするのははは楽しいつてこういうこと

## ◆大瑠璃泥貝

中嶋康雄

国道沿いに  
大瑠璃泥貝が突っ立っている  
道路標識みたいに突っ立っている  
頭には苔が生えている  
苔には熊虫が住んでいる  
熊虫が樽になって  
風に飛ばされてゆく  
大瑠璃泥貝は五億年以上  
国道沿いに突っ立っている  
大瑠璃泥貝は流れる餌を  
時々吸い込む  
国道を車が走る  
前方で自動車事故が起こる  
壁にぶつかって炎上している  
自動車だけが燃えている  
人は少し手前の道路標識にぶら下がっている  
少しずつ吸い込まれている  
全部吸い込まれて  
しばらく経つと  
服だけが道路標識にひっかかって  
風になびいている  
服に熊虫の樽が  
いつの間にか  
くっついている  
雨が降る  
樽が熊虫に還る  
熊虫が服を食べる  
食べ尽くすと  
また樽になって  
風に飛ばされてゆく  
国道沿いに  
大瑠璃泥貝が突っ立っている

## ◆カエルを踏んでしまう

中嶋康雄

飛び出すカエルを  
踏んでしまう  
四肢が激しく痙攣し  
いやな断末魔の声を出し  
黄色味がかった白い腹が  
ビクビク波打ち  
によるによる蠢く腸が飛び出す  
いやな臭いの腸が靴に絡まる  
腸は湯気をたてながら  
けろける鳴きながら  
靴を這い上つてくる  
靴を慌てて脱ぎ捨てるが  
腸の先端には  
歪んだ小さなべろを出すブラックホールが  
あり  
踏んだ人を呑み込んでゆく  
プラットフォームで  
電車を待つ隣の人が消えてゆく  
ラッシュアワーの電車内  
いつの間にか人一人分の空間が  
ぽっかり空いていたり  
足から腰のあたりまで消えて  
必死につり革につかまっている人もいたり  
いやな臭いの腸は  
先端をゆらゆら動かして  
流行するインフルエンザウイルスも吸い込  
んでいる

インフルエンザウイルスの鞭毛とカエルの腸が

競って先端をゆらゆら動かし続けている最中

それでもカエルを踏んでしまう母は卵を産んでしまう

卵から孵った赤ん坊をマンションのバスタブで

育ててしまう  
元気に泳ぐ黒い赤ん坊を見て

喜んでしまう  
手が出て足が出て

ピョンピョンと母の背中に飛び乗る  
そんなわが子をかわいがつてしまう

そして踏んでしまう  
わが子は母の乳を吸わず

イトミミズを食べている  
幼児専門の缶入りイトミミズが売られてしま

う  
カエルとカエルを踏む人の

何もかもが混ざり合い  
インフルエンザウイルスが遺伝子交換の宴

を踊り狂い  
によるによる蠢くカエルの腸の磁気嵐が吹

き荒れる中  
インフルエンザウイルスだか人だかカエル

だか  
もう区別がつかない

ウイルスだと思つたら  
微小なカエルだったり

微小な人だったりする

カエルは

もう冬眠することはなく  
インフルエンザウイルスとともに

猛威をふるう  
群衆の距離感が

お伽噺になる  
猛威をふるう

空間の消滅  
アメーバー状につながっていく

消滅の中  
カエルの恩返しだけが

ひつこく塗りたくられ  
乾きようがない

粘着の鼻水が世界を出発する  
飛沫の夜

電車の音が響き続ける  
常夜灯に群がる

腸を垂らす  
ぺちゃんこのカエルたち

雨に濡れ  
無数の大きな目が光る

目の中で  
ウイルスが

母の顔して  
笑んでいる

生物未満のカエルや人は

電車内の空気中を  
ふわふわ浮きながら

キューキュー鳴いているらしい  
キューキュー鳴きながら

多細胞の人やカエルに飛沫感染  
カエルが新しいコンピ्यूータウイルスを開

発し  
オタマジャクシが幼稚園で

くしゃみしながら  
高熱に苦しみながら

消化不良のイトミミズを口から垂らしなが  
ら

アルファベットを学んでいる  
カエルは靴に踏まれ続けている

踏まれたカエルはアスファルトに擦りつけ  
られる

でらでらカエル模様に光るアスファルトが  
鳴きながらピョンピョン跳びはねる

ねちやねちや交尾する  
黒い卵を産む

卵が孵る  
育つアスファルトが

黒長い舌で  
ベロベロ走る電車を絡め取る  
ハイヒールの踵が

カエルの頭をぶち抜いている  
カエルの欠片が

ピョンピョン跳ねて

電車の座席から

あこがれのおへそを見上げている  
カエルの欠片が

お尻を囓る  
カエルの欠片が

メタボを拝む  
カエルの欠片が

靴に踏まれ続けながら  
足の裏に吸着し

血を吸いながら  
鳴いている

鳴きながら  
溶けている

溶けながら  
産んでいる

生まれ続ける次のカエルは  
インスタントで

お粗末で  
目玉がなかったり

舌がなかったり  
ハエを上手く食べられない

カエルは踏まれ続ける  
人はカエルになつたり

ウイルスになつたりしながら  
それでも

会社に通勤し  
日々刻々全身がメルトダウンするまま  
カエルを踏み続ける

暖冬

## ◆蜂起

大西隆志

手を振ると渦が舞う  
産毛に風がたつ  
湿度を感じてもいたのか  
歩きながら公園を過ぎて行く  
一日の始まりにしてはいいほうだ  
もちろん終りの日に  
手のひらを振りながら終るのもいいか  
寒暖の差は日々の暮らしをダブらし浮かび上がらせる  
決着のつかない  
大きなものが差しだす言葉を  
手に持って振ってみるか  
反省なき声はぼくらの指先からこぼれていく

発禁になる前の藤森成吉の昭和五年刊『蜂起』を手に  
平野青ざめる。に目がいく  
(二十六字削除)と印刷された頁を偶然に開いた  
時は天保十三年初め頃。百姓一揆の四幕十七場の戯曲は  
(三十字削除)のいまを描いていたりして  
声も言葉も、身振りも気にしている  
手を振る過去の先を見すえた覚悟になっているのか  
旗を振っている人の脇を通りすぎる  
青ざめた横顔に風が舞っている  
しゃべるな、しゃべるな  
駆除される野生動物の真似をして  
手で温度を感じてみる  
いまは歴史の縁にあつたように  
杖を手に膝をかばい  
握っているものを差し出しては自らの精神をささえる  
歩数を少しだけかせいでみる  
本の中の群集はひとつひとつの声を投げ出していた  
いまここで、日焼けの古書籍を手にして  
言葉をついやってみるか

## ◆測量

寺岡良信

落葉がいつせいに散つてゆく  
戻れない眠りの隘路を下る人の  
まなうらに  
落日を釉薬のやうに滲ませて  
波が母を洗骨した  
みづうみに  
投錨する船―  
星雲の浜づたひにきて  
幸福の深さを測量する

## ◆長いさんぽ

御着かおり

狼の腹に入っていた石に  
つまづいた  
温かい筈のクッションも  
痛いだろう傷もわからなくなった  
入道雲で開かれる木の扉の向こう  
楓の根元に  
きのこが3本生えていて  
何のきのこかと思ううちに  
坂道を下ると落としてしまった その悲しみのようにわかることが無いのです  
〈懐かしい。〉  
見えない重さを  
宥める為には  
夕方の木立から垂直に降っている  
蜘蛛の糸より僅かに細いというそれが  
夏の公園に確かにあるのですけれど

## ◆バカボンのパパ

野口裕

くすんだ石路の花が  
ここぞと照り  
一本の紅葉樹が  
ひらひらと手を振れば  
抱けるはずない希望が  
湧いてくる  
朝

混乱の時代だからといって  
体液を流せぬままに  
世を去ることもある

あの紅は  
いまごろになって  
流れているのだ

淡い陽射しと  
かつての死者との  
共鳴が生む  
望み

輪廻は  
転生ではなく  
転死なのだ

## ◆天の川

高木富子

佐渡に横たふと詠まれた天の川が  
地球に向かって落ちていく  
地上では気づかず思わず見ず・・

座礁した真昼があり 座礁し続けようとした愚かな真昼があった  
薄い曇りガラスがあり 固く閉じられた扉も壁もあつた  
高度一万メートル 此処にある我が身  
残りの夢に 尾ひれをつけてあげよう

夜間飛行の空に  
下弦を過ぎた月の無言  
天の川が地球に突き刺さる

旅渥てに  
帰還に  
月光を聴く  
この一瞬 あなたに連なる 銀河に連なる

## ◆足跡

有時秀記

砂丘にたたずむ巨人、空にただよう雲にもとどくほどの背の高い巨人が、歩を進める。それとともに砂丘の砂粒がぎしぎしと音を発する。足音と砂音の合奏とともに、点々と巨人の足跡が残される。

足指の跡はしっかりと砂に食いこみ、その痕跡が力強く巨人の存在を主張する。  
足の親指が砂地の下を圧すると、その足跡からは、上空へと淡い緑色の光がぼんやりと放たれる。その光は徐々に親指の跡から、足跡全体に広がる。

やがていくつもの足跡を残した巨人は、放たれる淡緑色（エメラルドグリーン）の光によって形づくられた羽にまとわれ、遙かな雲の上に運ばれながら、砂丘から、星々の近く、天空の座に至るまで、光る通路をらせん形に形成しつつ立ち昇る。

淡緑色の光る通路はオーロラのようにも見え、その通路（パス）が定まるとき、砂丘にひとりたたずむ女が砂地から、足の親指跡をすくい取る。すくいとられた砂は鉢を満たし、砂丘の女はおもむろに一粒の種をまく。

光る通路からは、光の発する熱が鉢に降りそそぎ、旬日ののちに、花を咲かせるのである。花の開き輝きとともに、砂丘の女はみずからの両手に新たな人の子を抱くのだ。そして人の子は淡緑色（エメラルドグリーン）の光を放ちつつ、みずからその光にかこまれ、輝いている。

2014年11月9日でベルリンの壁崩壊から数えて四半世紀ということになる。壁の残骸は世界中に贈られ記念碑となっているほか、各地のメディアも大きく伝えているようなので、ドイツだけが騒いでいることではないと思う。今朝は、講読しているわけではないのに、号外のように、ビルト誌 *Bildzeitung* から『親愛なるドイツ Liebes Deutschland』と題した特別号が郵便受けに入っていた。

授業中などに協道に外れて、あのときの感激を話しても学生の反応が薄くなってきたのは、すでに十年以上からのことだと思ふ。よくよく考えてみると、1989年に生まれの、恩師の娘さんは現在25歳で、間近に医学博士課程修了になると言うことだから、先日「エアランゲンに来ているなら是非会おう」と誘われ、久々の再会が成就したときに、時間の流れはもう止められないと思ったりもした。以前にも書いたかもしれないが、私は1988年に渡独し、その年の外国人が大学生になるために行われたドイツ語能力試験のテーマが「東西ドイツ再統一」だった。よく研究室にも遊びに来ていた恩師の幼い令嬢が、自分で自分に名前をつけることができるならこう名乗りたいと書いていた秘密の名前 *Minik* のサインでメールを *Toyomi* にくれながら、親

しみとも懐かしさともいえないような心ある誘いに応じると、私は数時間エアランゲンの町で、宮殿に隣接した植物園を中心に案内してもらった乳母ほどの心境になり、あの革命が忘却の彼方に史実としてある世代の到来も当然だと思ふのだった。

当時のベルリンの壁崩壊のニュースは、正直に言うと、何が起こっているのか、私には全く理解の範囲を超えていた。渡独後すでに一年経過していたが、私は独文から来た人に比べるとまだまだドイツ語能力もなく（その年、チャウシエスクが銃殺されるとは思わなかったと、同時に試験合格した日本人が言っているのを見て意味不明だった）、インターネットもない時代（週に一度駅のキオスクで売られる朝日新聞衛星版を何人かで廻し読みした）、突然なんの前触れもなく（もちろんホーネッカーの水面下での動きや人々の行動等は情報があった）、歴然とそびえていた国境を開いたので（そういえば、大学の語学授業からも、屋根裏部屋の知人も国境地帯を見に行ったことがある）、当日テレビをつけて（テレビは一年間客員教授として滞在していた日本の方に帰国の際に譲り受けて所有していた）、旧東独国産車トラバントが続々と西ベルリン側に乗り込んでいる映像をみて、驚くというよりも文字通り、何これ？ 嘘やろ？ と呆然としたのが実際であった。この霜月のニュースを聞かされたときに、年々と呆然とせず

済むぐらいには理解するようになってはいるが、この国の言葉で私は、*Minik* と同じ年なのだと納得したりもした（時間を経て、この点に関しては到底ネイティブに敵うはずはないが）。

近年のニュースではもっぱら、壁崩壊後四半世紀が過ぎても東西の格差が埋まらないという点に集中している感があり、特に今年はウクライナ情勢等に関連し、冷戦終結後で東欧西欧関係が最も冷え込んだ状態にある。祝賀前日の8日には壁崩壊時のソ連最高指導者ゴルバチョフがベルリンの旧チェックポイント・チャリーリーで第二次冷戦を警告している。ゴルバチョフは、西独首相コールが示した巨額の対ソ経済支援を受け入れることでドイツ再統一に承認を与えたが、それが守られていないと言っているのである。当時から、東西ドイツ再統一は、西側が東を吸収する形で行われ、首相コールが統一時の首相として歴史教科書に載りたいがために強行したとも言われていた。韓国から来た友人は、我々はこの東西統一のような南北統一を考えてはいないと言い切った。ただ、目まぐるしく変わる情勢を理解しきれなかった私には、単なる個人的感傷からではないものの、平和的・革命的・親愛なる統一ドイツは感激するに十分だった。

旧ドイツ民主共和国の国民は再統一に際して、一人100マルクをプレゼントされた。比較的東に近い旧ドイツ連邦共和国の町はトラバントで溢れかえったことを覚えている。ベルリン屈指の百貨店 *Kaufhaus* などは100マルクを握り締めた東ベルリンの人々でいっぱいになったらしいが、100マルクで買えるものなどそうそう陳列されていない。東復興の目的で連帯追加税という税金が現在も西側の納税者に源泉徴収され続けているのに（コールは一年間のみと言っていた）、格差は縮まない。私は外国人だからひよっとすると関係ないのかと思いつつ給料明細を見たら、しつかり天引きされていた。

翌年の統一前には東欧および東独を旅行して、その格差を、特に精神面で目の当たりにした思いだった。ライプチヒのレストランで、半分残した料理にタバコの吸殻をこれ見よがしに押し付ける、いかにも横柄な西側ビジネスマン。「今、魚は電子レンジに入っています」と誇らしげに言う東ウエーター。ニーチェの母の家を見に行こうとナムブルグに行くが、インフォメーションの女性は「がっかりしないでくださいね」と申し訳なきように言うほど、戦前の銘版以外は朽ちていた。彼が生まれたレツケンに行くと、社会主義は何もしなかったので、かえって生前時さながら、鶏が散歩するような野道が霧に浮かんでいた。今世

紀に入って、学会ののち生家の教会を訪ねると面影もないほどそこだけは西側一般家屋のように、小綺麗に修復されていた。

当時とても人気のあったロック歌手 *Udo Lindenberg* の『パンコウ行きの特別列車 *Sonderzug nach Pankow*』や『僕たちはただ一緒にいたいだけ *Wir wollen nur einfach zusammen sein*』を語学講座で聴いたりしたのも、その後、だっと思ふ。いまでもCDはもっているが、唖れた、しかも鼻にかかった独特の声を耳にすることも少なくなった。この人は、分裂時に東ドイツでコンサートをさせてくれと直談判し、それを叶えた人でホーネッカーから礼状をもらったりしている。HPを見ても、彼は2015年7月にコンサートツアーを予定しているらしい。拙訳。

東ベルリン生まれのあの娘  
ウド・リンデンベルグ (\*1946)

ちよつと想像してみてもほしい 君が東ベルリンにやつて来て  
そこですごく熱い娘に出逢ったとしよう  
そう パンコウから来たすごく熱い娘なんだ  
君はその娘のことをとつても大事に思う  
そして彼女も君をそう思う  
そこまではいいのだが 君たちは一緒にいたいと感じてる

そしてアレクサンダー広場でローリングストーンズと  
モスクワのバンドがコラボするロックフェスティヴァルを夢みてる

だけど突然時計の針は十一時十分過ぎをさしている  
そしてあの娘は言うんだ ねえ 遅くても十二時には向こう側にいないと  
大変なことになるわ  
だって君は昼間のまぼろし  
東ベルリン生まれのあの娘 本當にきつかった  
もつと一緒にいたかったのに 僕は行かないやいけなかった  
また来るよ……たぶんいつか大変なことにならなくなつてるかもしれない  
時間をかけてなんとかしなくちゃいけないんだ

みんな はやくちゃんとしてくれよ  
だって僕たちはただ一緒にいたいだけなんだ  
たぶんもう少しながく  
たぶんもう少しちかく  
僕たちはただ一緒にいたいだけなんだ……  
Udo Lindenberg: Wir wollen doch einfach nur zusammen sein (Mädchen aus Ost-Berlin), 1986.

## ◆茶色い妹

黒田ナオ

海の上の工場では  
今日も何かがこぼれていく  
私の大切な妹が働く工場では  
高い煙突からくすんだ煙と一緒に  
細くて長いため息が流れて  
知らない人の隣で黙々と働く妹の  
顔をすっかり忘れてしまっそうで私は  
歩道橋の手すりにもたれ  
海のほうを眺めながら  
妹のことを思っている  
言葉がね ころがつていくのよ  
ベルトコンベアの上を  
ころころ流れていくの

妹が笑っている  
海の方から手を振りながら  
私に話しかけている  
その唇を動かして  
何かしゃべってはいるのだけれど  
私にはもうその言葉がわからない

海の上の工場では  
今日もベルトコンベアの上を  
妹たちの言葉が流れていく  
はじめは黄色くふわふわしていた言葉たちが  
いつか乾いて茶色く変色していくのを  
感じていても何もできない私は  
工場が無理やり箱詰めされた言葉たちが  
海を越えてどこか知らない国へ売られていくのを  
ただひとり  
遠い歩道橋から眺めていた

## ◆亡者も生者も

大橋愛由等

花瓶になりきっていた  
家の中から門をかけ  
日長 戸外の様子をうかがい  
世間がわたしを向かないように  
世間がわたしをわすれるように  
家の中で迷子になっていよう  
亡国した帝国地図に  
画鋏をいくつも押して  
気に入った  
ワンピース  
がないから

太古より  
虫たちの脚の数が  
変わることはない  
なんて  
やだ

もういちど  
裏木戸の  
戸締まりをしよう  
亡者も生者も  
きらい

母も  
古画のなかに  
出入りしていたから  
夕餉は  
ドイツパンと山羊チーズ  
たとえ  
触先がわたしにむけられ  
出航していたとしても  
羅針盤は

破門されると  
いいのよ  
わたしに  
話しかけないで  
わたしに  
話しかけるときは  
花瓶に  
ガーベラを

家のなか  
わたしは花瓶  
花瓶はわたし  
山羊チーズは  
あとのこり  
ひときれ  
戸外では  
まだら風が  
こちらを  
うかがっている

## ◆ 異国のサドル

福田知子

異国の空はしずかに凍っていた  
草の校庭に置き去りにされた自転車  
草は凍り強い風にも靡かず  
緊張したままピンと白んでいる  
手袋をはずしてサドルに触れる  
指はサドルに貼りつく  
指とサドルはひとつになって  
凍る  
静脈は凍り  
血は凍る  
やがて動脈まで凍りついても  
視ているものは  
触れているものは  
「大きな手」のみ  
きつと誰もが凍ってしまったのだろう

\*大きな手があらはれて昼深し上から卵をつかみけるかも  
北原白秋『雲母集』

## ◆ 染透く

福田知子

深い森が染透く  
あなたの生身染透く黎明  
銀河の牡牛が牡牛座となる永劫のゆめは  
もどれない旅人のゆめ されど  
流転の森の粘菌たち645は  
植物とも動物ともつかぬ生を営み  
酵素を喰らい朽木の分解を遅らせる  
こうして森の掌上に  
一縷のゆめが誕生するであろう  
白鳥も星々も王様も森の番人も  
染透きの森の住人  
森は触手をあげて参星を焚く\*

\*吉田一穂「死の馭者」より

## 映画『悪童日記』…原作をかたわらに



『悪童日記』ホームページより引用

おそらく映画だけを観たらおぞましい印象をもつだろう。原作をふまえて初めて映像にするだけの価値と監督のおもわくが理解できるのではないか。画像にできない残酷なシーンをカットし、それらきわどい場面をこちらの想像の範囲におさめている。つまりはアゴタ・クリストフの小説『悪童日記』を読んでいることが要求される。それほど小説の文章と脚本のせりふまわし、双子の少年の風貌がびつたりしているのだ。

にしてもこの映画はきつい。戦争、貧困、飢餓、性的暴行あるいは児童ポルノ、ジェノサイド、教会の墮落、親子の葛藤、民族の他国からの抑圧、母語の矯正などありとあらゆる負の社会要因が主人公の双子兄弟をとりまく。彼らは大人たちの振る舞いを逆手にとり自分たちだけの倫理観を培い対抗していく。

大戦末期、双子の「ぼくら」は大きな町から小さな村の祖母の家に疎開する。乱暴で不潔で周囲から「魔女」とよばれている。祖母はぼくらをメス豚の子とのしり過酷な労働を強いる。ぼくらは出来事を日記にする。夜は屋根裏で聖書の暗誦や計算問題の学習をする。

アゴタ・クリストフは一九三五年ハンガリーに生まれる。学童期にロシア

語での勉強しか認められなくなり、学業

をあきらめたふしがある。数学が得意だ

つたらしい。二〇歳

で結婚、翌年のハン

ガリー動乱で民主化

の活動家であった夫

とともに西側のオーストリアに亡命する。生後四カ月の乳児を抱いての逃避行であった。難民キャンプをへてスイスに

## H A N A 便 り 07

はいるが、フランス語圏であったため不自由な生活をしいられる。やがて離婚し二十五歳で念願の大学入学をはたしフランス語をまなぶ。あらゆる職業につき子供三人を育て、一方で自作詩や脚本を書きはじめる。一九八六年に初めての小説『悪童日記』を世に問うことになる。だが一躍脚光をあびるということはなく、人づてに評判をよび、やがて世界中に翻訳され有名になる。三部作で『二人の証拠』『第三の嘘』と続く。このなかで双子である真意が問い直され、A・クリストフの高度な文学的仕掛けが張りめぐらされている。

「ぼくら」を主語に筆記された物語。ぼくらは一人称複数である。どちらがどちらでもない、複数のままぼくらは語りだす。地名も登場人物も固有名詞をもたない。ぼくらは宣言する。一切の嘘は書かない、感情は漠然としているので書かない、事実だけを書く。しかし事実もちがう角度から見れば違うこともある。書き記すことで真実になるということだ。

映画でもナレーションが「ぼくらは…」と淡々と続く。祖母の暴力と罵詈雑言に慣れるために二人で殴りあつたり、暴言をぶつけあつたりする。ぼくらはぼくらを鍛える。白い紙に殺した虫を貼りつける。殺すことに慣れる。いや慣れるためではなく殺されることを恐れないために殺すことに慣れる。そのような論理が(国境に近い村では兵士たちが日常のように殺し合いをしている)さりと述べられる。

教会の女中が二人を不憫がって世話をやく。母親がわりをかって出るので。風呂に入れ、服を洗濯してやる。菓子を与える。若い女中は美しい。二人は女になつく。だが、ちかくの収容所に送られるユダヤ人の行進に毒つき靴屋を密告した女を二人は爆薬で怪我をさせる。二人は大人の態度をじつと見極める。カメラを見つめる。観客は二人の強い視線にさらされるのだ。黒い四つの瞳。美少年ながら眉をひそめる彼らのこわい顔はまなうらにこびりつく。私に向けられた凝視は私の奥底をのぞきこみ何かを照射されるようだった。あれは何だろう。人間のほのくらしい後ろめたさ、そんなものがぼつと現れる。これは映画にしかできない。

A・クリストフは二〇一一年に映画の完成を待たずに亡くなる。ヤノシユ・サウス監督 ドイツ・ハンガリー合作

中堂けいこ

◆往路

上野都

秋に訪う小雨の石段  
杉木立 千年  
屹立が踏み込めた傾き

ここまでなら  
登ってもいいが  
登らなくてもよかつた と

頂きに限りはあるが  
ここで委ねれば  
地の果てに落ちることも利那

たった一年を経ただけで  
慮し 溜め 猛り

目を焼く紅  
一枚 一枚  
劫火に張りつく静寂

来てみれば  
頂きはひそかに閉じ  
血の色を映しませず  
ただ  
時空を穿つ沙羅双樹

剥す手が急ぐ  
剥す爪が疼く

秋  
燃え尽きるまでの  
血染めの という

無謀

冷徹  
天を覆う深紅の諦念

百済寺 という秋。

◆アンクレットを隠し

高橋雅城

七七十五題

冬早こぬやうになる納豆売  
聾啞の婆と養女にあらば  
落葉はく箒の柄には朝日照る  
病める腕の細きにありて  
一日の疲れブーツばかり過ぐ  
をむなはアンクレットを隠し  
白壁に動かざる影小春の日  
自澆覚えし児に明過ぐる  
冴ゆる夜や遠き国道車疾く  
遅き帰りの姉を待ちつつ  
花売が今日に現はる十二月  
売れる売れぬも今日の終ひと

冬ざれや十円にして文庫本  
いにしへ人は聴く無口に

冬めくや尖り縮みし魚の骨  
病む人の寝間着は白く過ぐ

鼻の声止むここは闇となる  
知恵を授かる伝説を聞き

口べたの友あんこうを吊すなり  
一刀をもて病い正せよ

男ども女ども突く鮫吊らる  
愛の煩惱知るものは群れ

突かれては寒鯉の目は濁りをり  
中国女に血しぶきぞ散る

枯柳さわぐ星のみ明くあり  
アル中ばかり通りゆく道

木造の築二十年霜の声  
窃盗犯の隠れる町に

枯野ゆき野井戸に声を収めては  
遺体を探す旅にまた出む

冬五句

閉ざされし手を開きては冬日和  
豚汁のじるが人情嬢もらう  
マネキンの肌短日に青ざめて  
味の素なめてバカボン来る師走  
名も知らぬヌードグラビア冬ざるる

## ◆いびつなコインロッカーズ

中堂けいこ

日曜の深夜の階段をおりるとそこはロッカールームで、彼らは手荷物の間からいきなりあらわれて、ニッケル銀貨をせびるのだった。どこかでりんりと鈴の音がひびいて彼らの反省会がはじまる。車座にすわりうんざりするほどのしつこさでコインの山を囲み一掴み一掴みを数えている。手垢のにおい金臭い血に似た匂いがあたりをおおい、ロッカーに産み落とされたようなかれらのいびつな頭の形が魅力的に光はじめる。どこかでまたコインが落ち込む音がする。車座の彼らは一掴みをもつと小さな山に重ね一週間分のわけまえを分かち合う。ここで産まれた子ども何人かや私書箱代わりの札束がいかほどのコインに替わり彼や彼女の一週間が担保されるのだ。地上では明日の雨が降りしきり、あいもかわらず軍艦マーチと銀玉がころがり油の紙をつめこんだビール瓶がとびかう。またコインの落ちるやかな響き。大型ロッカーの扉を開ければちょうど同じ背丈の寸法でいわばいつかの立棺はふれるなふれるなと暮改の鈴が鳴り響く。かつて生きたときがあったか。かつて生きたときがあったか。

## ◆あなたへ

富哲世

あなたはひとあし先に  
いくつもりかもしれないが  
先にいくのはいつも  
肉をさらして生きている  
曖昧なぼくらのかたちで  
足並みをそろえるということも水に潜む  
わがままなぼくらの方位  
それでも何とはなしに  
始まろうとする音楽を待ち受け  
足もとに垂れた空を見上げ  
みんなくずれたビルの姿勢で緩やかに映りこんでいる  
あるものはぼんやりと希望を語り  
あるものは酔いからさめて血を流し  
あるものはまだやさしい  
生首をぶら下げたまま  
いづれにしる火を積む  
滑稽で不可思議な  
人生の破綻に出くわしながら  
それだって立派に  
地上に降り立った

天使のカケラなんだろう？  
誰が先かあとかなんて  
結局はどうでもいいことだ  
飢えた港で  
ぶりの頭に食らいつく  
犬の神様を前にして

存分に待ったのだから  
たしかかな音色を響かせて  
消えたぼくらの夜のへさきに先回りして  
あなたはいつももうひとりのあなたとなつてことばよりひとあし  
遅れで到来する  
ぼくらはもう帰りたい  
ぼくらはもう逃げられない  
そしてここから先はもう  
醒めても夢見ているのでもない孤独の続きだろう  
銀河時間のタイムカードをカチャリといわせて

〈永遠の愛だけがぼくらを分かつことができる〉  
いつもの門をくぐると  
渡り廊下の向こうから  
講義ノートを小脇にかかえて  
何をされても構わない  
あなたが歩いてくる  
もうすぐ  
三時限目が始まるのだ

# 神戸詞あしび

86-2014.11.30 大橋愛由等



俳人・赤尾恵以さん

## 自在な俳句は 詩として魅力

「もうシヨパンは弾けないわ」

一月二三日(日)、「北の句会」が、神戸市東灘区の「ギヤラリー 兜子館」で開かれた。そこは、阪急神戸線・御影駅を下車して一〇分ほど歩く住宅街の中にある。

冒頭の発言は、同ギヤラリーの当主・赤尾恵以さん。俳人・赤尾兜子(一九三五-一九八二)の夫人である。

恵以さんは、神戸女学院音楽科で学んだ才媛。同校を卒業してプロの演奏家としての活動を始める。毎日新聞の記者だった兜子は、恵以さんと結婚する際、ピアニストとしての活動をすきなだけ許容したそう。

その恵以さんが、われわれ「北の句会」の句会が終わったあと、ギヤラリー内にあるグランドピアノで演奏してくれた。曲は世界各地の民謡をモデル形式でつないでゆくもので、その淀みない指運びに、プロとして活躍してきたキャリアの深さを実感することができた。ただ、恵以さんは「もう指が広がらなくてオクターブを弾けなくなったから」という理由で、シヨパンの曲は演奏できないのだという。

鍵盤に五指の白さよ日雷

赤尾恵以(以下同)

この日、恵以さんの最新句集である『譚詩曲』を購入した。

この第六句集のタイトルも音楽と関係があり、バラードという意味である。この他にも『マズルカ』『交響』など句集のタイトル

ルには音楽にまつわる名が多い。

兜子忌の支度忙しく亀鳴いて

三月一七日の「兜子忌」を詠んだ句である。恵以さんは兜子の死後、俳誌「渦」の主宰者を引き継ぎ現在に至っている(11月号で五三号の誌齢)。もう三〇年以上が経過している。

意志一つ冬天に鳥はばたきぬ  
初蝶の高み昨日の空よりも

恵以さんの句は想が大きい。そして自在である。たまたま選んだ二句なのだが、一句目は、五・五・七(あるいは五・七・五の句まがり)。二句目は、八・九の構成といったらいいのか、季語を踏まえつつ、一七音字を守っているが、詩としてのコトバの成り立ちを重視することによって、五・七・五からの自在さを獲得している。

無住寺に女の気配萩こぼれ  
無防備に素足を晒す夜の風  
雪女同じ話を繰り返し

この三句は有季定型を守り、伝統俳句としての骨格もしっかりしている。かつ女性性を感じる作品内容である。

恋告げる扇子開きてはすばめ  
次の世は蝶に生まれて恋もよし  
手の中にほほづき一つ又逢はう

ひとというのは、やはり何歳になっても恋や恋することを忘れてはならないのかもしれない。恵以さんが詠う恋のうたはどこか爽快さがただよ。

穴まどひこの世に忘れものなきか  
さかしらも作爲も捨てよ梅雨の雷

高齢であること、余生を意識することで、ことさらに今の生が力強く立ち上がってくる。果たしてわたしは馬齢を重ねてどのような句を作りえるだろうか。ふつと溜息がもれる。

### 詩と評論

月刊『Mélange』VOL.97  
めらんじゅ

2014年11月30日 通巻97号  
発行所/月刊『Mélange』編集部  
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F  
編集・発行人/大橋愛由等(『Melange』同人)  
Mobile 090-5069-1840  
maroad66454@gmail.com  
定価 500円(税込)